



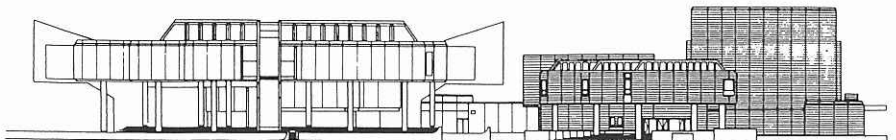
富岳図 谷文晁筆 1幅
 柴野栗山・古賀精里賛
 文化2年(1805)作
 佐賀県立博物館蔵
 ※2～3頁に資料紹介

佐賀県立博物館・美術館報

SAGA PREFECTURAL MUSEUM・SAGA PREFECTURAL ARTMUSEUM

31 March 2004

No. 132



資料紹介

谷文晁筆富岳図（柴野栗山・古賀精里賛）

・黒い富士山

駿河湾越しにながめた富士山。湾内には一隻の帆船が浮かび、その近くまでせりだした岩山は、薩陀峠（静岡県由比町と興津町の境）であろう。もちろんこの鳥瞰的ななごめは絵画的虚構であるが、薩陀峠の上空から北東方向にみえるであろう富士山の姿として違和感をおぼえない。

画面のほぼ中央に富士山をすえた簡潔な構成で、ほとんど水墨だけをもちいた描法もまた簡潔である。山頂付近が黒々とした富士山の姿は、濃墨で輪郭線もなく面的に塗られ、麓は淡墨で、にじみやぼかしてあらわされている。そのなでつけるような筆運びに躊躇の跡はなく、出来上がるまでおおく時間はかからなかったであろう。

速成の作とはいえ、細部の手際に破綻はない。たとえば山頂付近の塗り残しは、わずかに雪をいいただく様子であり、季節は古賀精里の賛の第一句「炎蒸七月正煎熬」との呼応関係をもとめれば、夏7月ということになる。中腹及び麓に棚引く雲煙も、おなじく塗り残しによる。さらに注意してみると山頂の背景には、淡黒と淡朱がごく薄く塗られていることに気付く。つまり明け方頃に時間も限定されてくる。また山頂付近に棚引く雲煙は右上で、わずかに山の背後へ回りこむようにみえて、さりげない演出が心憎い。

・作者と賛者

画面左下に作者の落款があり、款記と署名「乙丑春日写／文晁」に、印「文晁」朱文連印が押されている。「乙丑」は文化2年（1805）のことで、その年の春、谷文晁（1763～1840）の作とわかる。

江戸画壇の重鎮として知られる文晁が、田安家の家臣として松平定信に仕えて



富岳図（部分） 谷文晁筆 佐賀県立博物館蔵

※全図は表紙

いた時期にあたり（「定信附」だった期間は1792年～1812年）、絵画制作はもちろんのこと、定信の命による寛政12年（1800）序文の『集古十種』の刊行や、文化元年（1804）の『名山図譜』の刊行にたずさわるなど、その精力的で幅広い活躍によって、すでに広く知られた存在であった。

画面上部には右に幕府儒者の柴野栗山（1736～1807）の五言絶句と、おなじく左に古賀精里（1750～1817）の七言絶句が賛としてそえられている。両者の賛は画上部を等分するように書かれ、引首印と款印の位置もそろえられており、ふたりの着賛が同時期になされたものとみられる。栗山と精里に、さらに尾藤二洲をくわえて、「寛政の三博士」と称された当時一流の学者である。この作品が制作された文化2年に文晁は数え39歳であり、栗山70歳、精里56歳にあたる。

ちなみに精里は佐賀藩出身で、藩校弘道館の教授から幕府に召出されたのは寛政8年（1796）のこと。当館はこの作品のほか文晁の画に賛をした作例をもう2例、《山水図》1幅と文化7年（1810）作《清溪訪友図》1幅を所蔵している。

また『精里三集文稿』巻4に「題河村翁写真」という漢詩が収録されている。つまり精里が「河村翁」の肖像に着賛したことが知られ、この「河村翁」こそは川村寿庵のことで、前述の『名山図譜』の編者である。



落款（原寸）

文晁の画稿のなかに寿庵の肖像が残されていることから、寿庵肖像が文晁の作品である可能性が指摘されている（森銃三「川村寿庵とその名山図会」）。このような文晁作品への着賛の例だけをとっても、文晁と精里あるいは栗山等との親密な関係が理解されよう。

ここで森銃三「谷文晁伝の研究」によって、文晁の履歴をしらべると文化元年（1804）正月、栗山の駿河台邸における会合の席上、文晁が同邸楼上からみた富士山を描き、このとき精里も同席していたことが知られる。したがって、その翌年の春に制作されたこの作品においても、おなじような会合の場で文晁がえがき、同席した栗山と精里が着賛する情景がうかんでくる。夏7月の富士山を題材とすることは3人のうちのどれの発案であったろうか。

・文晁と富士山

文晁は天明6年（1786）24歳作の《溪山無尽図巻》で「写山楼」という堂号を使用している。文晁の堂号「写山楼」は、富士山を好んでえがいたことに由来すると清宮秀堅「雲煙所見略伝」は伝えており、たしかに文晁の富士山を題材にした作例は枚挙にいとまない。だが制作時期のあきらかな作例としては寛政5年（1793）の《公余探勝図》のなかの洋風描写による図が最も早期になる。

画にえがかれる富士山は、頂上を冠雪した姿が最も一般的であり、文晁の作例においても同様である。この《富岳図》のような黒々とした山頂の富士山の作例はすくなく、文晁の文化11年、文政6年、及び同11年の制作記録である縮図冊11冊のなかに数例見出される（上野憲示「谷文晁縮図冊」）。文晁によるこの種の作例の承譲は今後の検討課題だが、嘘月美術館（山梨県）所蔵で寛政7年（1795）作の《富士山中真景全図》を先行する作例としてあげることができる。

さいごに右下に押された印2顆、「雲琳」朱文変形印と「児島雲林稀庫」朱文重郭長方印に注目したい。つまりこの《富岳図》は、かつて児島雲琳（雲林）という人物の所蔵であったことを示唆している。この雲琳については、京都大学附属図書館所蔵の富士川文庫のなかに「古医方晰義」があり、この本は児島宗説が口授したものを児島雲琳が筆記したものとされる。宗説

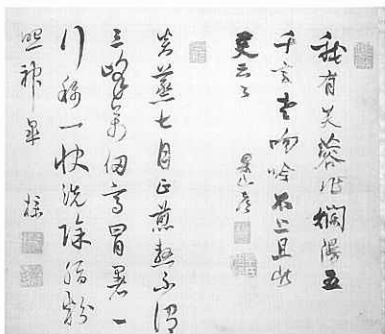
と雲琳は親子であろうか。詳細は不明であるが、「古医方晰義」は享和2年（1802）の刊行なので、この作品を所蔵していた雲琳は文晁と同時代の人物と考えられる。

場合によっては雲琳が単に所蔵者というだけにとどまらず、文化2年の春に夏7月の富士山を題材とすることを注文した当の本人であったのかもしれない。

この作品は縦103.9cm、横32.6cmの絹本墨画淡彩による掛軸装で、平成15年度購入により当館の所蔵となった。



鑑蔵印



〔栗野栗山彦〕
我有芙蓉伴 爛漫五千口。

老吻吟不上。且此□云々。

引首印「偶尔成」白文長方印

署名「栗山彦」

印「邦彦」白文長方印・「柴氏彦輔」白文方印

〔古賀精里貫〕

炎蒸七月正煎熬。不渭三峰萬仞高。

冒暑一行秒一快。洗珠脂粉照神畢。

引首印「去矜」白文長方印

署名「傑」

印「古賀傑」白文方印・「淳風氏」朱文方印

（学芸員 福井尚寿）

研究ノート

鶴清気の油彩画

作者について

鶴清気(1863～1938)は明治時代の佐賀における図画教師⁽¹⁾であり、同時に、佐賀の洋画(油彩画)黎明期に生きた洋画家でもあったといえる。

鶴の画歴については、これまで作品がほとんど見出しされていないこともあり、現時点でその全貌を把握するのは困難であるといわざるを得ない。しかしわずかに残る作品からわかり得ることと、断片的な記録を紡いでゆくと、鶴が佐賀県における洋画の普及に少なからず貢献した人物であることは確かだとわかる。

金子一夫『近代日本美術教育の研究 明治時代』(平成4年、中央公論美術出版)によれば、鶴は「明治12年7月以降より峰是三郎⁽²⁾に西洋画を学」び、また「同16年1月から翌年6月まで長崎と京都に遊び、長崎では師範学校の西敬に西洋画を学んだと思われる(中略)同21年8月(勤務先の佐賀中学校を)退職し、その後二回京都に行く。二回目の京都旅行で田村宗立に就き油画を学んだ」とされる。鶴がそれぞれの師から、具体的にどのような指導を受けたかはわからないが、西が工部美術学校に学んだ人物⁽³⁾、田村が京都市洋画壇の指導者であったことを思えば、油絵具の使用法をはじめとした、油彩画の本格的な技術を鶴が習得したの

は明治16年以降と考えられよう。

また鶴は、明治31年の明治美術会創立十年記念展に《淑女弾琴》《耶馬溪》《耶馬溪噴雪橋》の3点の油彩画を出品している。佐賀県内においては、明治30年代末頃に至って、複数の洋画の指導者が登場し、いよいよ洋画がひろく教授、認知されていくのだが⁽⁴⁾、鶴のようにそれ以前にあって、しかも地方に住み東京の展覧会に出品をはたした例は稀で、そういった面からも鶴の存在は先駆的できわだっていたはずである。さらに鶴は後年に創立される「佐賀美術協会」の第1回展(大正3年7月、佐賀県会議事堂にて開催)にも油彩画(牧場)⁽⁵⁾を出品している。

鶴清気の油彩画《清流》について

鶴の作品は水墨画が数点、そして油彩画2点が確認されているのみである⁽⁶⁾。そのうちの1点《清流》(佐賀県立美術館蔵)が、昨年修復を終えた。本作の修復を担当されたのは修復研究所21(東京都豊島区西池袋)で、その過程でいくつかの注目すべき特徴も発見されたので、その概要を以下に記す⁽⁷⁾。

作品は一見、市販のカンヴァスに描かれているように見えるが、手製であり、紙を貼った薄い布に描かれ



鶴清気《清流》 油彩 62.5×132.0cm 佐賀県立美術館蔵(写真撮影 修復研究所21)

ていた。また木枠は和骨で、屏風や襖と同様の構造であった。

絵具層には多数の剥落が見られ、固着状態はあまり良くない。地塗塗料の種類は詳細な分析をおこなわねば何ともいえないが、白色ではなく、水色の有色下地がほどこされている。なお絵具層の剥落は、この有色下地のすぐ上層から発生していた。絵具層は全体に薄塗りだが、暗部に比して明部により厚めに絵具を乗せる描法（インパスターン）や、物の形に沿うような運筆（ハンドリング）が随所に見られるなど、筆触を生かした、いわゆる旧派の技法にのっとったものである。画風はあくまで実景の写生に徹し、対象の質感、量感の描写に神経を集中させている。

本作を見るかぎり、鶴は外光表現以前の洋画技法、洋画の空間表現やモデリングの感覚をある程度はそなえていたことがわかる。しかし、全体に写真的な描写であり、平板で生硬な印象はまぬがれない。鶴は達磨図など水墨画も多数制作するなど、日本画が自らの描画表現の基盤であったと思われるが、洋画の空間表現についての理解と技量は、その深度に限界があったのかもしれない。

今後の課題一鶴の画歴と本作品の位置づけ

鶴がはじめて佐賀中学校に赴任した明治14年は、百武兼行（1842-1884）がちょうどイタリヤにて洋画を修学中の時期にあたる。ヨーロッパにて計7年の研鑽を積んだ百武と比べると、鶴の洋画修学歴は実にささやかなものように見える。だが洋画受難の時代にあつて、地方でわずかな情報と機会をとらえ学んだ鶴の行動力、先取性は、今後、画歴のさらなる考証をとおして、より評価されるべきものであると考えている。

ともあれ、鶴の油彩画作品は今後も新たに見い出されていくであろうし、本作の年代特定という課題も残されている。

佐賀の近代洋画史の主たる部分は、百武兼行の登場を端緒として、久米桂一郎、岡田三郎助とその教え子といった東京美術学校関係の脈により形成された。それと同時に、鶴のように主流から離れた修学歴を持った画家たちが県内の洋画壇に与えた影響もけつて少なくないはずである。かれらもまた、地方画壇を

支える重要な一員であったといえよう。

（学芸員 野中耕介）

・鶴清久の略歴については、金子一夫「近代日本美術教育の研究 明治時代」中の記述がもっとも詳細である。今回、それを基礎として一部補足し、参考として以下に記しておく。

鶴 清久 文久3（1863）年～昭和13（1938）

文久3年4月、佐賀藩士清久の長子として佐賀県高木瀬村長瀬に生まれる。最初佐賀の徳者・石井藩に漢学を学び、国文、日本画および洋画を研究する。佐賀、大分、長崎各県の中学校で教員をつとめるが、佐賀中学校には明治14年12月～16年1月、同17年7月～21年8月、同31年5月～大正9年10月の計3回勤務している。洋画ははじめ明治12年3月（もしくは7月）より峰三郎に学び、同16年1月～17年6月まで長崎と京都でも学ぶ。長崎では長崎師範学校の西敬に学んだと思われる。同21年8月に佐賀中学校を退職。その後2回京都におもむき、田村宗立に就き油彩画を学んだ。同22年7月～26年9月まで長崎中学校に勤務した。佐賀中学校に奉職中、従六位に叙せられ高等官五等の待遇を得た。以後、佐賀中学校を退職後は佐賀松原神社の神官となった。明治美術会会員にもなっており、明治31年の明治美術会創立十年記念展に油彩画《淑女兜帯》（耶馬溪）《耶馬溪吹雪橋》を出展した。また、大正3年7月に開催された第1回佐賀美術協会展に油彩画《牧場》を出展した。

鶴の署名は洋画には「清久」、日本画には「清屋（鶴屋）」「敬堂上」。また「鶴仙」とも号した。著書に「達磨百態」（昭和3年）「観音百態」（昭和8年）がある。

- (1) 「佐賀県教育五拾年史 中篇」によれば、明治31年5月～大正9年10月の佐賀中学校在職中、鶴は修身の教師として教鞭をとっていた。
- (2) 金子一夫「近代日本美術教育の研究 明治時代」によれば、峰三郎は「東京師範中学校中學校師範科を卒業後、佐賀中学に赴任したと思われる人物」であるという。
- (3) これも上掲書による。なお西は明治美術会第2回展に油彩画《無愁卿》を、同会創立十年記念展に水彩画《山水》を出展している。鶴に同展への出品をうながしたのは西であろう。
- (4) 田村宗立、浅井忠、小山正太郎、鹿子木重郎らに就き洋画を学んだ高木輝盛（益賀県生）が佐賀師範学校に赴任したのが明治38年、また京都府画学校、小山三造に学んだ森三英（福岡県生）の佐賀中学校への赴任が明治40年、さらに明治41年、不同舎に学んだ平島信（福岡県生）が小城中学校に赴任している。
- (5) 以後、佐賀美術協会展は毎年1回開催されるが、鶴の作品は第1回展のみであった。出品作《牧場》は現在所在不明。
- (6) 鶴の油彩画については、本稿紹介の《清流》の他にも1点《耶馬溪図》（明治40年、油彩・板、個人蔵）が確認されている。明治31年の明治美術会創立十年記念展に同じ題名の作品が出品されているが、裏書の制作年代と一致せず同一作品ではないと考えられる。
- (7) 作品の所見等にかんしては、修復研究所21・渡辺都夫氏による「修復報告書」によった。

（参考文献）

- ・金子一夫「近代日本美術教育の研究 明治時代」（平成4年 中央公論美術出版）
- ・松本誠一「佐賀県の洋画事情」（『近代・九州の洋画家たち』国語館収 昭和53年）
- ・『御大典記念 佐賀縣大観』（昭和3年 佐賀毎日新聞社）
- ・鶴清屋（清久）「達磨百態」（昭和3年 日本神書刊行会）
- ・「佐賀県教育五拾年史 中篇」（昭和2年 佐賀県教育会）
- ・「明治期美術協会展出品目録」（平成6年 東京国立文化財研究所編）

レポート

「こども土曜クラブ」の10ヵ月

「博物館にくるのが楽しかった。」という声が聞こえた。2月28日、最後の「さむらいを知ろうー佐賀にさむらいがいたころ」が終了し、みんなに修了証と縄文アラカシの種を渡して解散した時のことである。全10回のうち9回参加してくれた小学校二年生の男の子であった。担当者として、とても嬉しかった。また同時に少し安堵感も湧いてきた。

「こども土曜クラブ」が始まって以来、毎回のメニューに参加した子ども達は、どれくらい満足しているのか？また、為になっているのかという自問が消えることは最後までなかった。実際、「楽しくない。」「まだ終わらないの?」という声が聞こえることもあった。博物館・美術館ならではの「こども土曜クラブ」を提供しようと、こちらが意気込んでも、子ども達にとってどうなのか？また、保護者の方々の期待はどのようなか？



開講式ー子ども達だけで71名集まったー

先回の館報で4回目までの土曜クラブの状況を紹介したので、それ以後を報告したい。平成15年度の「こども土曜クラブ」の実施内容は右ページの表のとおりであった。

5回目の「彫刻の森スタンプラリー」は、佐賀城公園内に設置した26体の古賀忠雄の彫刻をクイズを解きながら巡るという企画であった。5～6名のグループに分かれて行ったが、ふだん気付かなかつたり、何気

なく見ている彫刻の名品を再認識することになった。また、反面同じグループになりながら、なかなかうくとけられず、最後まで別行動する子ども達もいた。



彫刻の森スタンプラリー

6回目は「美術館の展覧会を楽しもう」であった。開催中の佐賀県立美術館20周年記念企画展「近代洋画の開拓者たちーアカデミズムの潮流ー」をみるものであった。もちろん、クイズを行ったり実際に油絵を描くなどの体験もあったが、美術館で絵を見る時に絵を触らない、他の観覧者の迷惑にならないように静かに見る、走り回らないなどの基本的なマナーを、一流の名画を鑑賞しながら学んだ。美術館開館20周年をむかえたとはいえ、美術館での鑑賞のマナーが佐賀で定着しているとは言えず、小中高生の団体見学がある時は監視職員を増やさなければならないのが実情であり、小さい時から少しでも美術鑑賞に親しむ機会を持たせようとするねらいがあった。

7回目は「佐賀県の自然とむかしを訪ねてみよう」で、唯一バスによる見学会である。東与賀海岸のシチメンソウ観察、芦刈町の有明水産振興センターでのムツゴロウ観察、そして昼食をはさみ小城町歴史民俗資料館見学、三日月町の土生遺跡公園見学を行った。年に一回は、博物館・美術館を出て実際の資料や現地に触れてみようとする企画である。「なぜ有明海の堤防はこんなに大きいのか。」「なぜシチメンソウという名

前なのか。」「弥生時代の生活の様子が分かった。」など、体験して初めて出てくる疑問や感想をもってくれたようである。



東と賀海岸のシチメンソウ観察

8回目は「お堀の冬鳥たちと遊ぼう」を行った。佐賀野鳥の会の3名の講師の指導により観察の仕方や注意することを教えてもらった後、城内公園や佐賀城のお堀に集まる鳥を観察した。「いつも通っているお堀なのにこんなにたくさん冬鳥がいたなんて信じられませんでした。」との感想があったように新鮮な発見があったようである。

9回目は「むかしの道具—これなーに?—」で使い古しの年賀状を使ったなべしきづくりに挑戦した。子どもの力で折るには紙が少々かたく時間内に完成できない子どもも多かったが、逆に見学やクイズ形式の時には集中出来ない子が一番に仕上げるなど子ども達それぞれの個性が垣間見られた。



なべしきづくりに挑戦



本物の鎧に感動する

最後の10回目は、博物館常設特別展「肥前佐賀のものふ」をクイズ形式で見学したり、実際に日本刀を持って重さを実感する体験などを行った。特に男の子にとっては、本物の鎧や鎧、刀、鉄砲などを目の前にしてワクワクドキドキの経験だったようである。

以上、5月から始まった「子ども土曜クラブ」も無事に終了することができた。毎回、千代田町の「おもしろ体験歴史塾」の子ども達も含め40名以上の参加者があったが、最初に述べたような「子ども達は、どれくらい満足しているのか? 為になっているのか。」という疑問への明確な解答はまだでない。新年度は、その辺りも考えながら企画を考えていく必要があるだろう。

	内 容	開催日
1	博物館・美術館ってどんなところ?	5月31日
2	佐賀城本丸たんけん	6月21日
3	ギャラリースケッチで空想画を描こう!	7月26日
4	大昔の土笛をつくらう!	8月23日
5	彫刻の森スタンプラリー	9月27日
6	美術館の展覧会を楽しもう	11月1日
7	佐賀県の自然とむかしを訪ねてみよう。 県内バス見学。	11月22日
8	お堀の冬鳥たちと遊ぼう—野鳥観察会—	12月13日
9	昔の道具これなーに? —なべしきづくりに挑戦!	1月24日
10	さむらいを知ろう —佐賀にさむらいがいた頃	2月28日

(資料係長 家田淳一)

平成16年度の展示予定

■博物館企画展「よみがえる肥前刀」

昭和20年(1945)の太平洋戦争の終結の際に、多数の刀剣類が廃棄されたり海外へ流出しましたが、一部は赤羽(現東京都北区)に集められ、のちに「赤羽刀」と呼ばれることになりました。その多くは最近に至るまで眠ったままでしたが、平成7年(1995)の終戦50年を契機として活用されることになりました。

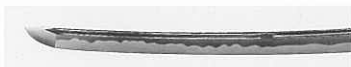
今回の展覧会では、当館が所蔵する114口の赤羽刀のうち、修理を終えた85口のほか、肥前刀を中心に約100口の刀剣を展示します。

平成16年10月29日(金)～11月28日(日)

修理前



修理後



脇指(五代正広)銘 肥前国藤原正広/河内守依求受領

■常設特別展(美術館2・3号展示室)

◎美術館はタイムマシーン

絵画・工芸品で50年前や400年前の旅をしよう。

平成16年7月16日(金)～9月5日(日)

◎くらしを映す木器展—古代の木工—

最新の木器資料を使って、古代の生活を映し出す。

平成17年1月28日(金)～3月6日(日)

■博物館テーマ展(博物館3号展示室)

- | | |
|---------------------|-------------|
| ◎古代ファッション—緑と金—<考古> | 4/20～6/13 |
| ◎鷹と葡萄の画家—天龍道人—<美術> | 6/15～7/25 |
| ◎幕末の唐津藩<歴史> | 7/27～9/23 |
| ◎生き物のふしぎを見ようII<自然史> | 10/14～12/12 |
| ◎有明海図鑑<民俗> | 12/14～2/13 |
| ◎発掘された佐賀I<考古> | 2/15～4/10 |

■博物館・本丸歴史館連携事業

- | | |
|------------------|----------|
| ◎幕末・維新时期「雄藩への道」展 | 1/2～1/23 |
|------------------|----------|

■美術館常設展

- | | |
|------------------|------------|
| ◎新収蔵品展 | 4/23～5/30 |
| ◎花と鳥の絵画 | 5/12～5/30 |
| ◎私の名作 | 9/15～9/23 |
| ◎絵画にみる江戸時代 | 12/16～1/23 |
| ◎未知への挑戦—佐賀の現代絵画— | 3/10～4/10 |
| ◎江戸・明治の書 | 3/23～4/10 |

佐賀県立博物館・美術館 館報 第132号

平成16年3月31日

編集発行 佐賀県立博物館・美術館

〒840-0041 佐賀市城内1-15-23 ☎0952-24-3947 0952-25-7006

ホームページ <http://www.pref.saga.jp/kyouiku/hakubutu/index.html>Eメール hakubutsukan-bijutsukan@pref.saga.lg.jp

印刷 大同印刷株式会社